

## 在宅血液透析(HHD)における脱落例の傾向

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎腎クリニック

○船越 哲、佐藤泰崇、田賀農 恵、藤原久子、林田めぐみ、田中 健、永野 かおり、橋口純一郎、久保純子、原田孝司

### 【目的】

HHD 教育中または移行後に脱落した症例を検討する。

### 【方法】

2006 年から 2018 年までに当院の維持透析患者で HHD 導入の希望があり文書による同意を得た 25 名のうち、HHD 教育中または移行後に脱落し再び施設通院透析となった 4 例の傾向を解析する。

### 【結果】

症例 1) 48 歳男性、公務員、介助者は妻(看護師)。2006 年 10 月の HHD 移行以来、準備・穿刺・回収は全て妻が行い、患者は一切関与しなかった。妻が疲弊し 2 年半で HHD 脱落。

症例 2) 74 歳男性、介助者は妻。教育中は熱心であったが、患者の MMSE は 25 点と軽度の認知症があり、HHD の手技を学習できず 4 か月で断念。妻は 30 点と正常であった。

症例 3) 43 歳男性、介助者は妻。透析導入時より透析の受け入れは不良であった。教育の後に HHD に移行したが、同年末から自宅での透析の不安が強くなり、翌年 1 月に脱落した。

症例 3) 61 歳男性、HHD 導入の目的は通院の負担軽減(ASO で左足切断)、介助者は妻(看護師)。教育開始時には患者も妻も熱心であったが、患者の MMSE が 22 点であり、手技の学習が進まずに脱落。

### 【考察】

HHD 脱落例の傾向としては、患者自身の学習能力不足・精神的問題が特徴と考えられ、これを介護者がカバーすることは難しい。今回の検討でも介護者のうち 2 名は看護師で熱心であった。今後は HHD の適応を患者自身の能力と精神状態を第一に考えたい。